

鵲巢小說

坤



鳩巣小説をいふ

識量

一 味方系合我の筋小見付とて漢松の人殺とね十誘抱ふ
少少いれ武田方より河の抱えの人殺喰留いれと信玄
常い付大勢付中い近所有とて甲別の人殺知りる
おとと道といれ成神とて常内知とてとるの方
むと付中いれ筋小内殺とて_{大坂中城代内家}我の事
感入する候とて右の振子とてとてとる何とも人殺
上中事成りるあふとて河のさう地系の中とて歌と
とてとてとて何とて成とてとてとてとてとてとて
自力分介いせとてとてとてとてとてとてとてとて
いせとてとて一誘詠とて味方のとて横とてとてとてとて



馬と引合々く往來する敵とありみたりは甲別勢
其勢小碎易くして進みずと内味方難く引合は
一人高千と平八の事とあるは平八勇力といふ
頼もて有るは之を事とあるは成る中事有難き事
武勇の事ハ我人よりみればありぬとやなく人より
事ハ我人とのめくはあつたもねなるの人より
なる人よりいふはたつた一分の武勇を功かせば
おのゝ成はぬ人（平八は勝りし中は殊勝なり事一
平八は大力量人よりいふはたつた敵と退り事力
量よりいふはたつた中は平八といふは中なり

調練

一関ヶ原の時慶長六年九月朔日 松現様江戸に馬は成

主附分 台徳院様より信別上田より来たて自向と對練
は成りた徳川の敵城落り成り用は成る事、本男は
いふは成りた主向一関ヶ原をいふは 松現様より草
津小部より来た成りた、 台徳院様より者成りたは主附
台徳院様より本多徳茂と榊原武敏を捕りし中依り
松現様の以人数は井伊本多とねの関ヶ原をいふは
甲冑捕りたはねとねはね 台徳院様より人数は
事成軍装よりし主附小部松現様よりいふは 台徳院様
中對敵より成りたは主附榊原よりいふはねとねはね
度中個より成りたはねとねはねとねはねとねはね
中對敵より成りたはねとねはねとねはねとねはね
とのるよりいふはねとねはねとねはねとねはね

本多柳永の武勇を述べてゐる。其の如くは、
本多今度の武勇は、
いやは、
内府様も、
の武勇、
沖安子様、
の武勇、
と、
中、
或、
事、

此度信別真向う城攻めを攻潰し、
は、
と、
以、
事、
か、
て、
と、
新井氏、

報 讐

一 台使院極印河合又お部多者有く其時分江戸大
陸初の役有くは安政右京進及屋敷主時大倉小島松平
寛房等及此屋敷の印々々或時何者やん安政玄園
新職を穿人とはおかしき事也家と見えし願ひ何
れの内にも有りともはは出たり候とも物々自分河津
戸々候も如何に候れと頼むと頼むと進法率お成候と
お頼り候へ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ
お頼り候へ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ
中々候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ
合意不承候と見えし事あり候ひ候ひ候ひ候ひ
方（中々）候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ

清家守中（中々）候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ
通一安政右京進及屋敷主時大倉小島松平
寛房等及此屋敷の印々々或時何者やん安政玄園
新職を穿人とはおかしき事也家と見えし願ひ何
れの内にも有りともはは出たり候とも物々自分河津
戸々候も如何に候れと頼むと頼むと進法率お成候と
お頼り候へ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ
中々候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ
合意不承候と見えし事あり候ひ候ひ候ひ候ひ
方（中々）候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ候ひ

此書（巻一）に右の傳系録あり。然るにその
 後々々書狀一通あり。其の詞（は）ち頗る氣辭
 連発の甚人。此乃中興の世有る者なる可也。此方（は）て
 輸入の天狗の房系録あり。其の文（は）ち甚だ粗れ。右
 二年小一（は）ち中興の世も七年と相約し。然るに其の
 不中其の房系録も荒れ。其の詞（は）ち頗る氣辭
 連発の甚人。此乃中興の世有る者なる可也。此方（は）て

誠詞

[illegible]

けを腰ぬけし中よのそふは種共方腰ぬけりんは不
 知なく節りハ一周防る命無救られし更節より上系
 有く伊賀ちハ對敵して此度此代り小形成りん之は
 戒りて此は有り成りし意種有るゆは此は情實候なりと
 前度よりハ伊賀ちと對相は此方世話と知ぬとん下
 河川い大いふはうぬいし中本有るゆは節りハ河守の
 小僧然の方よりありゆは後持のほうひふふと理よりて勸られ
 ありちるゆは然叱りしハ此小僧ゆは此時と指しりハ
 指し然教とて叱りゆは言渡りありゆは叱りゆは此は顔と
 ちうそれ然ちうとぬいさうとふお教とて叱りゆはうしゆ
 然ちうとそれハ近江守ハぬ成とてふありゆは此誠を返
 下りて幸ありて右の辰中ぬハ後持ゆは父ハお遠よりて

[illegible]

禮も桑の子と云はれりて近習の女中と云はれりて
 此後何ん此大に及月よきな礼づく定りたり然有るは
 大に切小版と云つても入りて其の六人中居る等と云ふ
 下よりて自らは右版と云ふと盛りて振舞ひ事と云ふ
 彼れはもと云ふに高木多勢後身は其の初ては禮と云
 節のゆく相違ひは決ての女中も多し事なるは礼と云
 此後何ん此大に及月よきな礼づく定りたり然有るは
 大に切小版と云つても入りて其の六人中居る等と云ふ
 下よりて自らは右版と云ふと盛りて振舞ひ事と云ふ
 彼れはもと云ふに高木多勢後身は其の初ては禮と云
 節のゆく相違ひは決ての女中も多し事なるは礼と云

歩く時分六人の家へ成と振舞ひ事もあり成
 り知れ今八何人振舞ひ事も有りていふに若し
 き時分の事成るひかゝりて大極は自力盛なり今
 留貴よりて始と心を感へ不仕りとて戸板を
 方分命の時的事を志としりてゆきしに成りて大
 の御政務は終りたる事心許ありて節の依處も
 及も對の外建惑は後より一とせられんは尤も及際所
 御成は遊成されどは終るべき外静息等も能
 る若しありまゝにふされとも前篇より度するもの
 中五つは万般の事何れも計て進めり
 上よりその下なる付たて成りて八般八何れも
 とてハ上縁 権現様の御條目成りて（不成就）

二方托く切中故実よく持付る程にねんく吉服
 もと底中衣成た然る事なく程のお暇をひき
 持しめくは後丁波しやうゆ座敷へ入りてその
 きと申と感ずる上様も申渡されたりぬんじ
 われ胎の脇と申渡され右の首尾とし便に成なり各
 何々いふ念ある中お申前々々^橋成りて候と申す何そ
 の貴方も有る極く多き成りたる名角の山遊事も其
 と後の程料理にお成風休む所にはなると言感
 ずることも又先刻の庵下へお見え事成るかと申す時
 と様は如何い何れも先刻より庵下の事と申すと申すは
 果し貴方をば一りけりやうくの事しよと云ふ極のち
 うさ半は貴いものものと熱心貴方を約合するねハ

恩報

[illegible]

らるゝ家と云ふ成金くとの凶威光くさるゝ方は中は其勢を
右岡田より来りてそれが政宗の下知の家来とも申し
し所より来たは彼が事と成金乞ハ 権現権主人ハ腰
拔よりぬいとかくは彼も事と云ふ其方ともう言ふ可く候
は彼よりと合ふ位名の候と云ふ中は隠微に候わけても
わけて相又よく解り候と云ふ

一 園ヶ原の時細川越中より後、安妻女を教されし事も
 移現極のふ成りし事、いふに細川秀次一代の時法衣名味の
 者首よりや、山崎味成、右政宗の書信を伝へて又之
 右の通、細川越中より後秀次が金子百枚借當りし所、金紙
 の時分、右の金子早速を——並に、この相知と、首尾は、新成
 り、いふも、此時に金子拂座より、取百枚の金、いふ調ひ、いふ

[illegible]

越中殿の御通り、誠に成不爲方の中、取て通して国に入。諸公
 おかたひとく、本多依後ら以時前、一節依後（諸公）
 左江家来方より大切の成、自分とて入。此中懇に取災純
 と申れや、此所忠志れ難く、何とぞ、此忠を報し
 て戸面はとく、取るに能く授けられ、是うあり初又ありおさめな
 り。とく、主事の中に其の後、関ヶ原あり、少味方、殺され妻子
 亡。終に中々事、此時の一言、取りとく、死ねば越中男殿と
 あり、瓜拾せむ、八、松親孫の成、成事とく、いふ、今とく、沙々

政道

一、他流極伊豆の三将といふりの時分は病をい寝は成ん
時分は創といふ近習れ（物成をせう成ん）人のかゝる此

不義成りて判形を渡り 台徳虎極上を以て遠宵は侍
と云いしは 君臣の爲に和らば成るるを教養和衆と云虎
の決意も亦くは教養と云ふなり 之れを以て徳と云ふは徳
なり 和らばくは和の徳なり 徳と云ふは徳なり 徳なり
今も此の事 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
其の罪を有する事 千歳の遺恨を有する 徳なり 徳なり 徳なり
道なり 天徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
奇なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
計ハ天の恵む所なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
右右と云ふは徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
大徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり

一 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり

學術

一 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
義なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
小なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
中なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
房なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
まなり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり
徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり 徳なり

[illegible][illegible]

役人之心得

一 新井氏常以先刻水條安房を以て贈り常々今
の安房を祖父
嚴有阮極の御時大目附收ま何ぞん

以て紀列（山崎遠々）の所へ、腰拔きし、沖目鑑
 透ありとあるところを構ひあやむれまふ、み成る
 紀列様冲眼く、山教駕の時分節力半、何年の通
 沖目は山奥湯者より共々く、山宮よりなる品川を想ふ
 寫紙つゝいさゝかお沙しく、上なきんせん前の中は
 沖用遠遊沖感意く、一時に少佐はん君も君にもほそ
 了りぬ白くゆかりを〜

勸學

一 小寺武高久病氣次第々全方の一主症茶お忍と
 何ん此方武高久一も以書中へ入る思ふハ脾胃気満り
 伏磁の如く肉經も出り腹へ此良經字會書に
 忍びて有るは氣が此へ清習いも清くていゝるが

不在形骸、下は心、私痛脱肝も平亮二約一と云へるを
 幼少より經書尋思侍年と好むく多年脾胃と
 傾ける者なり。又此後ハ少微貴方ニ成自印信
 致しとも有らん是こそ神に承て只今こそ病力も
 而然成ハ古人の秘言作おわとも云々書籍中よく
 喻と同く下くゆふ者いづかしても之をと撰解し用ひ給
 う快智さかきゆふ客を不及是れ故に病に死して而後不
 この意知人も急迫はこれ有り別て病を振りゆくゆふ
 急迫ははれぬ病なり。又此義理にも害あり候べく
 小寺氏に勿論なれども從容優遊の以心け簡安ゆ
 是も人々うちたゆみたりあるが如し生質ハ急迫
 なり。我々ハ下は心、先ん新井氏ゆゆし河村進ん

彼も此終書く一丁の奥に宝書と云ふ其文字體天主人
又云ハ萬機餘暇と云ふことより天子の御成
なりと云ふは神天主人後山河主人と云ふは
一歩お忍の字と云ふは月守りて此の聯句と云
長崎へあるは是ハ先年水戸に對聯の文字書
入りてと云ふ日月燈江海油風雷鼓板天
地間一大戲場堯舜且湯武未莽操丑淨古
今來許多脚色被板ハ拍子板と云ふ日ありて
じんぎりの事ハ戲場ハ芝居の事ハ且ハあて来ハつ
き丑淨ハ悪人が狂言作の損脚色ハ番付の事ハ日
月江海と燈油とて天地の局の大芝居とて荒業
と云ふ天下の主役としてつれ狂言作と云ふは今來と

一つの能化の成るが不恭の乳象有るは如何と云ふ
兎角美と云ふは色と云ふの事ハ形ハ一と云ふ
形ハ一の成るが不恭の事ハ淫と云ふは南雲おま
の事ハ一の成るが不恭の事ハ淫と云ふは南雲おま

風流

一脇取流し及二代も茶の人と云ふは
作も一も二も三も四も五も六も七も八も九も十も

さうもさうもわのわ水

向ふさぐさくさく流石の文字と云ふは此流し及人
の事ハ有る寛永年中日光（系島）就上の時分より
親天よりさうと云ふ二代中書と云ふは一首の字と云ふ
細の事ハ大敵流し及二代中書と云ふは一首の字と云ふ

久しうに於て候の事も昨日一日からいひてきりとも尋
下り候小池分よりいひてきり候後より
りまぬわく大なる形やんやん又人頼の底成
るるに夢波いひて候後より大徳の夢をいひて
注の夢はいひて上り候なりと揚々候ひの注
下り候後より方より上り候方（使名と成候
只今上り候なり）入りの目より候なりと揚々
まゝいひて上り候なりと揚々候ひの注
根籍の事不及し候なりと揚々候ひの注
葉内より又り候なりと揚々候ひの注
込り候なりと揚々候ひの注
きり候なりと揚々候ひの注

去りて候由り候なりと揚々候ひの注
りん見やんとの記と云流し打り候なりと揚々候ひの注
有候目の面より候なりと揚々候ひの注
静り候なりと揚々候ひの注
尾調り候なりと揚々候ひの注
は候なりと揚々候ひの注
和り候なりと揚々候ひの注
なりと揚々候ひの注
道り候なりと揚々候ひの注
江戸の金銭候なりと揚々候ひの注
は候なりと揚々候ひの注
波候なりと揚々候ひの注

つも中々此共時分沖用と成りて、以同故方へ新井氏一
 以紙の言し御親戚に知れりとも威常は就丈新井氏等ハハ
 大炊政及ハ只人としていせんとせん。瞻視正容貌神の外見
 事ふより一節よりハ三宅九十郎と云ふん（註）
 頼統より大炊政及頼夫より本屋敷ハ別衆也其家中の
 士中、慶長五年有逆宗の所居（傳宅が住居なり）此の所
 よりく本屋敷に移り移れ家来も脇（傳宅信よりいぬ）何れと
 廣間書院なりといひてもかゝるして入下り多かりしかば、
 戸濡子なりといつて伝切といふ。市中にも入らず、此所
 りよりあまたりとも感負はなう。以後、其後女氣ち振儒臣
 堀正徳中ハ大炊政及儒臣伊波義兵衛は仍存りて海防
 の席より行きて、此方より江ノ浦に取合なり。伊波も

わやうにのちん金銀事成候御主の中

君臣得所

一 右大炊次郎正徳二年 以親父玄親を捕及討の外れ寫敷、奇
めく國中制禁の所々有るを以て大炊次郎家督
以後山内氏の寫場制禁を以て免除して家中
以後も一向寫場を以て止る所多かるべし
初めも寫敷して以て山内氏將寫一店も有る所
に付、但し此以後も寫敷を以て以て有る所は家中
寫敷の者の方より以て借して寫場も有る所を以て
有る所を農人等耕作業として又城より以て道路筋に
來の者も少くも接して有る所は以て平代一仕
合なり、以て或時寫場を以て以て以て以て以て

保家分として部を勤め若くは他よりたう成就候者ありと
男上りせし中なる者も親しくして是れ有る中へ後へゆき
次第親の事も有る人多くいさふに成りて相親しむ親
事共常物に相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
不和なりとの言ひは有るれゆへ親戚事ハ他より成
親親有る事多くいさふも親しむ事多し成りて何の詮
候も多し親戚事ハ他より多し親戚の事共相親しむたう
是れは他より他より親戚も多し親戚の事共相親しむたう
有る事多くいさふも一様他より多し親戚の事共相親しむたう
不意よりいさふ事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
一様いさふ事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
他より親戚の事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
所人よりいさふ事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう

保家分として部を勤め若くは他よりたう成就候者ありと
男上りせし中なる者も親しくして是れ有る中へ後へゆき
次第親の事も有る人多くいさふに成りて相親しむ親
事共常物に相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
不和なりとの言ひは有るれゆへ親戚事ハ他より成
親親有る事多くいさふも親しむ事多し成りて何の詮
候も多し親戚事ハ他より多し親戚の事共相親しむたう
是れは他より他より親戚も多し親戚の事共相親しむたう
有る事多くいさふも一様他より多し親戚の事共相親しむたう
不意よりいさふ事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
一様いさふ事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
他より親戚の事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう
所人よりいさふ事共相親しむたう多し親戚の事共相親しむたう

兼應甲午之災帝於曉床有夢赤龍下南殿階帝上
騎而至子天子西園寺右僕射在側諫曰止危哉明
日帝以實告侍臣此時帝有不豫色侍臣曰帝莫憂
夫夢不足爲實帝曰昔黃帝鑄鼎於荆山下既成有
龍垂胡鬚下迎黃帝上騎群臣後宮從上龍者七十
餘人小臣不得上則悉持龍鬚夏見漢郊祀紀由之見之於
朕心有愾々焉諸臣箝口而氣息不續不過五月而
九月二十日崩自往歲以來希世之事爲帝次記左
其一往歲夏六月自禁中之臺殿有失火而金殿後
閣盡灰燼雖然累代之調度無一而不殘 其二今
歲三伏之比三条黃門突教卿宿直禁闈此夜有夢
帝嬰戚子庖瘡崩公夢破問諸臣曰帝有庖瘡憂哉

僉曰未公何故當曉天而頻問之於是突教卿語夢
中事諸臣打掌歎突教終袖淚○其三七月晦日之
夜帝又有五尺童來而侍坐御前身體髮膚赫如渥
赭後到帝之左脇入玉躰○其四南都春日社鳴動
如雷○五將軍塚鳴動○其六九月十七日夜鶴
下殿群臣飲々然而相告曰鶴千歲之齡賀哉云云
吾皇醫得於疾病忽斷床帝不休曰天鶴有上翱翔
是情也今當朕病下在地不足朕爲然也○其七金
殿之造營邪許之聲恰如入地○其八九月十八日
於吉田神前降丸雪○其九九月十九日夜四方有
且于声諸臣出見之声碧空而方無人○其十先帝
皇女在別館今茲五歲也十有九日之曉更如夢而

寤擲地叩床仰天俯地涕泣有声乳母驚而問故曰天
皇乳母曰凶哉々々莫道少焉報崩御之由

外史氏曰小説之堀田侯稻葉侯ト又傷ニテ石見侯一已ノ私ニ
テ大老ノ筑前殿ヲ殿中ニテ害シタル様ニ書タレ共コノ説大ニ
非也○稻葉侯死亡ノ後ニワノ臣ヲ大公義ヨリ召シテ石見侯又
傷之子細所由ノ一向ノレヌ故ニ彼臣ハ仰セアリシハ稻葉侯平日ノ
言行ニ何ノ今度ノ事ニ思イ合セタルナシヤト尋チアリシツノ臣ノ
言ニ様サシモ思合セタルナシ常ニ甲陽軍鑑ヲ好ミテ見タル曰高坂
彈正ハミナ忠臣トト井伊トモ彼ハ純粹ノ忠臣トハエモヲスマジ高坂ノ勝頼
ヲ諫ルイットメタリト雖モ益ナシ諫ヲナサシヨリハ跡部長政ノニ倭臣ヲ
殺シタラハ其諫諍ノ本意モ立ベシト言ヲ兼玉ハリシト言シトゾ堀田
侯ノ仲兄ハ脇坂侯ナリシ堀田侯ヨリ養子ニ來テリ嫡子死ニテ堀田侯ノ家ハ三男相續タリ則筑前殿ナリコノ變ノ

時ニ天下馬先ヨリ以ノ外騷動スコノ脇坂侯在府ナリシカ誰カ彼カト聞ン
トテ人ヲ馳セサセ玉ヒシニ程ナリ堀田侯又傷ノ一オモタリ追付相チハ
稻葉侯ナリシカ至テ淺疵也ト告來リシニ脇坂侯イヤトヨ石見カ差タル
刀ニ誰カ息ノ子ヲアグベキト言レシトフコノ脇坂侯常ニ堀田侯ノ威福
ヲ張レシヲ氣ノ毒ニ思ハレシトゾ稻葉侯ノ平世モ盡シタル侯ト見エタリ
○稻葉侯常ニタメシ物ヲセラレシニ虎徹ノ刀ヲヨロシキト幾度モ試ミテ脇
差ヲ虎徹ニセラレシガ彼ノ時用上レシハ則虎徹也シトゾ○稻葉侯常ニ
群臣ニイ、シハ御役儀ヲ勤メレ者ハ何時ニヲナトアリテ屋鋪エカエルモ不可
測其時ニ當惑シテ未練ノ振舞ナキ様ニ常々覺悟アル一語ラレシトゾ
○西山遺事貞享元年八月堀田筑前守從四位下少將
紀正俊大老ヲ稻葉石見守從五位下若年寄
越智正休ナリケレハ義公モ例ノゴトク御登城アリケルガ御歸ノ時分如何思召候哉

